

伊豆大島近海地震の観光の被害と復興・復旧計画に関する研究

Study on the damage and the restoration plan of sightseeing of the earthquake at the sea near Izu-Oshima

○米山博史¹, 天野光一², 押田佳子², 佐野拓也³

Hirofumi Yoneyama¹, Koichi Amano², Keiko Oshida², Takuya Sano³

Abstract: Izu Peninsula has received the earthquake of 3 times in 1974, 1978, and 1980. This research investigated the damage and the restoration plan in the stricken area of the earthquake at the sea near Izu-Oshima from the newspaper. As a result, although the infrastructure building started early, it turned out that sightseeing is late. Since the earthquake occurred before revival of the front earthquake finished, since the earthquake occurred, much this is considered that advance is slow.

1. はじめに

伊豆半島は、日本有数の温泉地帯であり、温泉だけでなく、豊かな自然と温暖な気候を活かした観光地でもある。一方で海底下のマグマ活動による地震の被害に幾度も遭っている。近年では、1974年伊豆半島沖地震(M6.9)、1978年伊豆大島近海地震(M7.0)、1980年伊豆半島東方沖地震(M4.9)、と比較的大きな地震が、わずか7年の間に3回発生した。このような場合、前の地震の復興・復旧が終わらないうちに再度被災したため、地域の復興が滞るばかりでなく、風評被害によって、観光産業の衰退、地域力の減退に繋がることが考えられる。東日本大震災においても多くの観光地が被災し、同様なことが起こりうるかと懸念される。

観光は旅行者にとっては、余暇活動の一環であるが、受け入れ側にとっては生業であり、復興・復旧は急務である。以上の考えのもと、一度被災した後の観光地の復興・復旧を把握するため、本研究では、1978年に発生した伊豆大島近海地震の被災地を対象とし、その政策とそのプロセスを把握することを目的とする。

2. 研究対象

先述の3地震で2番目が発生し、最大マグニチュード7.0を記録した1978年伊豆大島近海地震について着目し、被災地の12市町村(Figure 1)を対象とする。

3. 研究方法

本研究では、Table 1に示す文献資料を対象に読み取り調査を実施する。

Table 1 Literature and data

文献資料	発行者
静岡新聞	静岡新聞社
伊豆大島近海の地震災害誌	静岡県
伊豆大島近海地震 災害報告書	日本建築学会

4. 伊豆大島近海地震の概要

1978年1月14日午後12時24分頃に発生した、伊豆大島近海地震は、震源地が伊豆大島近海の海底であり、マグニチュード7.0を記録した。さらに翌15日午前7時23分頃に伊豆半島中心部にかなり大きな余震によって被害は、拡大し、合わせて伊豆半島の12市町村に被害を及ぼした。この時の各市町村の被害状況をTable 2に示す。

Table 2. Damage situation

被害	市町村名	累計	市町村名															
			東伊豆	河津町	湯天ヶ島城	下田市	西伊豆町	伊東市	松崎町	南伊豆町	賀茂村	土肥町	中伊豆町	熱海市				
被害	田 埋没	ha	6	0.5		0.742	1.18	10.9		0.4	0.3			1.45				
	畑 埋没	ha	13	10.5		2.014	0.02	0.18			0.3			0.1				
	文教施設	箇所	84	14	6	5	33	7	10	4	3	1					1	
	病院	"	44	25	14						3	2						
	道路	"	1126	375	494	13	30	92	12	4	3	65	22	13	3			
	橋りょう	"	3		2		1											
	河川	"	65	18	27	10	2	3									5	
	港湾	"	12	4	1				4	2			1					
	砂防	"	2										1					1
	水道	"	532	78	85	116	31	106	7	4	3	90	12					
	清掃施設	"	5	1	2							1	1					
	崖崩れ	"	191	57	38	22	12	5	25	21	2				9			
	鉄道不通	"	26	12	12						2							
	船舶被害	隻																
	通信被害	回線	579	330	140				109									
	り災世帯数	世帯	733	534	72			41	41	3	15				27			
	り災者数	人	2997	2249	313			131	128	13	55				108			
	被害総額	百万円																
	災害対策本部設置(○印)	7市町		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

5. インフラの被害状況と復興・復旧対策

文献資料から、地震の被害状況と復興・復旧計画を捉え、復興・復旧におけるプロセスの読み取った結果をTable 3に示す。

(1) インフラの被害状況

「伊豆東南部交通マヒ(1/16)」「メドがたたない水道復旧(1/17)」にみられるように、被災地は、土砂崩れなどにより、道路が寸断された上に、ライフラインも途絶えたため、被災地が孤立したことがわかる。

(2) インフラの復興・復旧対策

「緊急通行 今日中に(1/17)」のように、震災二日後には復興への動きがはじまり、「電話と電気は完全復旧(1/18)」にみられるように、電話や電気は早々に復旧し、24日には河津町で全世帯に給水可能とな

1: 日大理工・院・交通 2: 日大理工・教員 3: 日大理工・学部・交通

ることから、住民の生活に必要なライフラインの復旧は優先的に行われたことがわかる。「トンネル化構想(2/10)」では、安全性優先のためにトンネル化が進められ、観光地としており、地域の貴重な景観を損なう恐れがありながらも、安全性を優先した復旧対策がなされた。

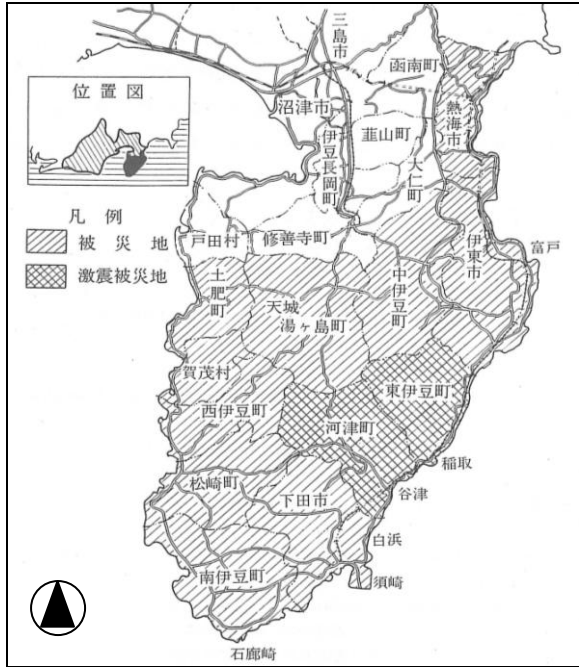


Figure 1. Izu Peninsula complete diagram

6. 観光の被害状況と復興・復旧対策

(1) 観光の被害状況

「相次ぐ 予約取り消し(1/17)」、「春の誘客 絶望的(1/22)」にみられるように、地震直後は安全性への懸念から、観光客の減少が目立った。この他にも、観光地の安全性への不安に関する記事が記載されている。また、

国道 135 号及び主要地方修善寺下田線は、通行不能となり、国道 136 号も翌 15 日朝の余震により賀茂村で崩土が発生したために、伊豆半島南部は交通が途絶えたため、被災日残された観光客は「観光客 舟で家路(1/17)」にみられるように舟での帰宅を余儀なくされた。

(2) 観光面における復興・復旧対策

「客なしで再開 交通復旧待てず(1/25)」「伊豆震災後初の宿泊客 稲取温泉(2/2)」にみられるように、観光地は度重なる震災により非常に厳しい情勢に陥ったことが伺える。観光地の復旧は、「第一次伊豆地域観光客誘致促進特別事業(3/10)」より実施され、マスメディアにその様子を伝えるべく、レジャー記者クラブ現況説明会、キャラバン隊による宣伝、伊豆観光情報ニュースの配布、ラジオ、テレビによる宣伝、などで取り上げられた。しかしながら、観光客入込み情勢は、依然厳しく、県は 6 月 15 日に伊豆急行全面復旧を機に、夏から秋の誘客のために、合わせ第二次伊豆地域観光客誘致促進特別強化事業を実施した。

7. 今後の課題

1978 年伊豆大島近海地震について、当時の新聞記事や文献を中心に震災の詳細を時系列で半年の期間を調査し、観光的影響を捉えることが出来た。今後は、1974 年伊豆半島沖地震、1980 年伊豆半島東方沖地震の復旧過程について調査を行っていく。

参考文献

[1] 1974 年伊豆半島沖地震 1978 年伊豆大島地震 災害調査報告書, pp421-423, 1980
 [2] 1978 年伊豆大島近海の地震災害誌, pp76, 1978

Table 3. The time series of Shizuoka Newspaper

日付	被害	インフラ	観光	その他	日付	被害	インフラ	観光	その他	
1978/1/15	河津、田子川、七人不明 河津町 大規模な土砂崩れ	×東伊豆:各地で道路守断 路上に大岩ゴロゴロのよりの助産婦 ×天城湯ヶ島:ダム壊れ冠水 従業員のまね不明			1978/2/2			○東伊豆:伊豆震災後初の宿泊客 稲取温泉		
1978/1/16		×東伊豆:伊豆東南部交通網で、孤立状態に ×伊豆半島:6路線18ヶ所が全面通行止め	×東伊豆:こたつに燃つけたまま ホールの借舎崩壊 ○下田:観光客、船で乗船	○県:河津、東伊豆町に災害救助法	1978/2/3		○土肥:土肥温泉で決起大会 地方あそびが中止 ○下田:再迎に懸命"観光伊豆" 赤浜へ誘客キャラバン			
1978/1/17	東伊豆:民家の9割以上が被災 人がたない水道の復旧	×伊東:緊急通行、今日中に 東伊豆	×伊豆:相次ぐ予約取り消し 温泉地に地震ショック	×伊豆:相次ぐ予約取り消し ×県:土肥、湯ヶ島、伊豆急 6路線の被害	1978/2/4			○伊東:"伊豆離れ"の打撃深刻 伊東旅館にも地震被害 誘客ハガキ作戦		
1978/1/18	県:被害額が110億円を超過し、1974年におきた「伊豆半島沖地震」の被害総額88億円を大幅に上回る	×河津、東伊豆町:河津で60%が通水、東伊豆は30%が断水のまま ○河津、東伊豆町:プロパンガスの点検が終わる ○伊豆:電話、電気が完全復旧 ○伊東:伊豆急は伊東-熱川間の運転を伊東		△東伊豆:相次ぐ予約取り消し △熱川:伊豆急は伊東-熱川間の運転を伊東	1978/2/5			○伊東:地震被害のワザビロ 復旧は収束後 ○県:伊豆復興に最大の力を注ぐ	○県:伊豆復興に最大の力を注ぐ ○県:伊豆復興に最大の力を注ぐ	
1978/1/19	河津:救助隊への道路不通のためにゴミがたまる 河津:7月11日の豪雨被害から立ち直った矢先に地震によってワザビロが大災害	○伊東:交通網復旧にツチ音 伊豆急、下田-河津間さよなら		○東伊豆:相次ぐ予約取り消し ○河津:伊豆急は伊東-熱川間の運転を伊東	1978/2/7			○伊東:交通情報伝達へ 伊豆は一つ 関係者が対策検討		
1978/1/20				○県:来年後半予算で75市町村に地震対策を推進することが決定 ○静岡県は被災者に対し、災害緊急融資を実施 ○河津:仮設住宅の資材到着 ○稲取:一週間以内に仮設 稲取中の生徒 授業再開に備え準備	1978/2/8				余震、震源に減る 事実上の地震宣言 今月は「有感ゼロ」の日も被災地伊豆にやっと静寂	
1978/1/22				×河津、東伊豆:春の誘客は絶望的 キャンセルも相次ぐ △東伊豆:客なしで営業再開 交通復旧待てず	1978/2/9			○東伊豆有料道路が復旧 28日ぶり全線開通 修善寺"通行注意"の看板移動 修善寺温泉(お盆が近い)に観光客誘致 △地元の観光客 伊豆の新年夜予算案からトンネル化構想 観光よりの命 ○東海バス、東伊豆有料道路の復旧で早から復旧再開	○河津、東伊豆:誘客に復旧に全力「伊豆の良さを再び見直して」 地震"終息宣言"にひと安心(静岡新聞) ○県:伊豆復興に大きな力 非常体勢の緩和後、県も	
1978/1/23				×河津、東伊豆:温泉など	1978/2/10					
1978/1/24				×伊豆東海岸:漁業再開も困難 損壊ひどい市場と漁船宅 ○河津:稲取の温泉街へ 復旧作業に全力をかける ○河津:ほぼ全世帯に給水	1978/2/11			○下田:さあ、誘客に本腰 国道135号線開通で 伊豆 東南部の観光地		
1978/1/25				△東伊豆町:客なしで営業再開 交通復旧待てず	1978/2/12				○修善寺:久しぶり観光客誘致 地震後の運休中伊豆温泉前に誘客 ○熱川:客足伸び悩み 熱川温泉 福まつり ここにも地震の影響 閉幕前の団体 やっと例年並みの入浴 ○伊豆:常設客は11日の夜の伊豆温泉 車の行進隊へ期待	
1978/1/27				○河津、東伊豆:再迎の準備着々と 給水車通いから解放	1978/2/13					
1978/1/30	県:土木は、安全対策を策定して危険箇所をトンネル構造に変えていく方針となった			○伊東:今日から運転再開 伊豆急、下田-河津間 稲取まではバスで運行	1978/2/14			×河津町、東伊豆、いつまで続く 復旧作業 地震後後途切りに復旧作業 住民 仮住まい まだ7世帯 葉山に仮設、浮石		
1978/2/1				○伊豆:伊豆急客に予約入れ 被災7市町村 被害から除名 知事、復旧を約束	1978/2/15				×県:地震との闘い 県の新年夜予算案から 中小企業に30億円の特 巨額の資金援助	

○復興・復旧に関する記事 ×被害に関する記事 △現状報告